# *The American*における Henry James のジレンマ

## ——Claire de Cintré を中心として——

有　馬　輝　臣

Henry James (1843−1916) は，作家としての新しい旅立ちと，ヨーロッパ永住という一大決心への二重の危懼を底に宿した長篇小説 *Roderick Hudson* (1875) で，他の先輩作家達が試みなかった国際状況 (International Situation) を本格的に長篇小説に設定することによって，彼の作家としての独自性を示すことができた。国籍こそ違え，James と同じように，祖国を離れ生涯の多くをヨーロッパで過し，パリで客死した Ivan Turgenev (1818−83) ならば，国際状況の小説を書いても，不思議はなかったはずである。成程，Turgenev の小説の舞台は，祖国ロシアにとどまらず，彼が転々としたヨーロッパ各地に置かれてはいる。しかし，舞台が，世界各地にとられているだけでは，James の国際状況の小説にはならない。風俗習慣や文化の違いのために，国籍の異なる人間が互いに理解できずに，傷つけ合ったり，爛熟の余り腐敗堕落したヨーロッパの道徳が，純心無垢な他国の人間を毒してしまうことによって生じる人間世界の悲喜劇が描かれていなければならないのである。だからと言って，なにも Turgenev を貶めているわけではなく，James の独自性を強調したいがための言及であり，Turgenev は Turgenev なりに，当時ロシアやヨーロッパに生まれつゝあったニヒリストや余計者など新しい人間典型を，いち早く小説で描いたばかりか，Lev Tolstoy や Feodor Dostoevski とは違った抒情的な小説を生み出しもした。そうした彼に，同質的なものを見い出した James は，彼から小説作法において，プロットも

さることながら，登場人物達の性格の発展こそ大切であるという教訓を学んだくらいである。

しかし，それはともかくとして，*Roderick Hudson* で国際状況を設定しながらも，一人の芸術家の成否に，言わば，James 自身の姿を託したがゆえに，国際状況が一応は描かれているにしても，背景に押しやられてしまう結果に終ったこともあって，James は，この国際状況を真正面から扱う *The American* (1877) を考えついたものと思われる。一般的に言って，James の作品は，たとえ，登場人物は変わろうとも，それぞれ，二部作，三部作と呼んで差し支えないほど，各作品が繋がりを持っているようである。つまり，一つの作品で，解決できなかった問題や，途中で副次的に生まれてきた新たな問題が，引き継ぎ事項として，次の作品に受け継がれて追求され，又，その作品で未処理に終った問題が，更に別の作品に継承されるのであり，その意味では，Honoré de Balzac (1799－1850) の各作品が，*La Comédie Humaine* として統一されるように，James の各作品が，それぞれ，有機的に繋がっていると言っても過言ではない。ちなみに，*Roderick Hudson* の中で，充分に描き切れなかったヒロインの Christina Light は，中期の *Princess Casamassima* (1886) で，再度描かれることになるばかりか，Christina と母親の関係は，Claire de Cintré と母の Madame de Bellegarde (Old Marquise) との母娘の関係として *The American* で扱われ，更に親子の対立の問題が，形を変えて，*Washington Sguare* (1880)の主題へと発展して行くのである。このように考えてみると，*Washington Square* で，親子の対立が小説の主題になっているということは，逆に言えば，*The American* では，親子の対立が，充分に描けていないのを，恐らく，James 自身気がついていたと思われる。そして，この *The American* が，読者に不満を与える大きな原因は，この小説がたゞに国際状況の作品にとゞまらず，親子の対立へと発展して行く可能性を宿しながらも，結局は尻すぼみに終ってしまったところにあるように思えるのである。

国際状況という興味あるテーマを発見した James の念頭からは，当時，恐らく，ひと時も，このテーマが去りはしなかったろうと想像され，事実，アメリカの鉄道馬車に揺られながら，彼は，この小説の枠組をふと思いつくのである。

> I found myself, of a sudden, considering with enthusiasm, as the theme of a "story," the situation, in another country and an aristocratic society, of some robust but insidiously beguiled and betrayed, some cruelly wronged, compatriot: the point being in especial that he should suffer at the hands of persons pretending to represent the highest possible civilization and to be of an order in every way superior to his own.[1]

つまり，一人の善良なアメリカ人をフランスの排他的な貴族社会に配し，若い貴族の未亡人との結婚問題を契機に，知らない中に，彼等に騙され裏切られて行くという状況を想像した。その際，裏切る当事者であるその未亡人の母や長兄を，因襲的で腐敗堕落したヨーロッパ社会にどっぷり浸っている，いわば，悪者として扱うことには，いさゝかも無理が生じなかったものの，悪女であってはならないヒロインを，当初の構想上，同じように主人公を半ば裏切る女性として描かなければならない羽目に陥ったところに，この作品における作者 James のジレンマが生まれる原因が胚胎していたようである。

この稿では，Newman にとって，謎の人物として終ったヒロイン，Claire de Cintré を中心にして，そうした James のジレンマを明らかにしてみたいと思う。

この小説の最大の難点は，上述のように，女主人公の Claire が，一旦は，家族の，とりわけ母 Old Marquise de Bellegarde や長兄 Urbain の不承不承の同意とは言え，Christopher Newman との交際の許可を得，結婚を決

意したにもかゝわらず，いざ結婚という段になって，母や長兄の反対に逢い，恋人を簡単に諦めて，カルメル派の修道院に籠ってしまうことにあると思われる。

八百年の伝統を持つフランス貴族とは言え，ブルボン家を擁護する正統主義者である Bellegarde 家は，ルイ・ナポレオンの支配する第二帝政下では，政界に入ることもできず，見かけの壮厳さとは裏腹に，火の車の生活を強いられている。従って，Madame de Bellegarde は，莫大な持参金をつけて長女の Claire を嫁にやることもできず，結局は，持参金など要求しない60才の老伯爵 M. de Cintré に，18才の Claire を，良人の Old Marquis の反対を押し切って，嫁にやったのである。家の財政難を救うためには，娘の気持など全然斟酌しなかったこの Claire の結婚が，幸せなはずはないのである。

James は，この小説だけに限らず，ことあるごとに，ヨーロッパ人達の間では，愛情を無視した財産目当ての結婚やおざなりな結婚が，いわば，社会の通念になっているのを暗に非難している。そうした人間同志の愛情や信頼などに重点を置かず，たゞ，社会的身分や政略のために結婚させる血の通わぬやり方を，*Washington Square* では，'Such a peculiar matter-of-course way in Europe'[2] と呼び，この *The American* でも，Mrs. Tristram に，'in the French fashion'[3] と批判させている。恐らく，James の目から見れば，このように忌わしい結婚は，ヨーロッパの悪風に染まらない限り，個人の自由を尊ぶアメリカでは見られない光景と映っていたに違いない。

結婚式の前夜には，気絶し，一夜を泣き明かした事実は，それが，いかに気に染まぬ結婚であったかを物語っており，Cintré 伯の死後，財産の正当な相続権を，親の反対を封じてまで放棄したのは，Cintré 伯の過去の不行跡が暴露されたからであり，実際，彼が 'vicious' な人物であり，彼女の結婚生活が不幸であったことを，Mrs. Bread は証言してもいる。そうした苦い経験をし，結婚などもうコリゴリだと肝に銘じたはずの Claire が，Newman

を紹介され，結婚に踏み切るには，よほど，彼を愛していなければならなかったろうと想像される。Newman の紹介者が，Claire のかっての学友 Mrs. Tristram であったことにもよるにしても，彼女は，当初から彼に対しては好意的であったし，家に引き籠りがちであった彼女が，Newman を Faubourg St. Germain の自宅に積極的に迎えるのも，彼に対する並々ならぬ好意を裏書きするものである。しかも，Newman が Bellegarde 家を訪れた際，次兄の Valentin が Newman に与えたであろう突飛もない印象を改めてもらうために，Valentin を，わざわざ，Newman の所へ差しむけ答礼訪問をさせるのは，Claire 自身が，Newman との交際が進展していくのを望んでいる証拠と考えてまず間違いない。もとより，Claire の Newman との交際は，Claire からすれば，結婚を前提としたものでなかったことも事実で，彼女は，一人の 'admirer' として彼を見做していたのであり，Mrs. Tristram の解説[4]によれば，気に染まぬ再婚話を母や長兄から，又もや持ち出され，気がふさいでいた彼女にしてみれば，'unusual, unexpected, original' な Newman は，恰好の話し相手であり，慰め手であったはずである。しかし，この時点では，彼女が，彼の磊落で善良な人柄に惹かれて，好意的であったというだけで，充分なのである。Newman の愛の告白を前にして，彼女が，苦痛と当惑の色を見せたにしても，それは，再婚はすまいとの強い決意のゆえに，彼女が好意を抱き，今現に，楽しく交際している友人に，苦悩を与えねばならぬことを案じての結果に過ぎず，又，彼女の目から見ても，アメリカの実業家とフランス貴族の娘とでは，結婚など当初は，恐らく，不可能と写ったからと思われる。しかし，のちに，Claire が涙ながらに告白するように，彼女は，Newman を心の底で愛し始めていたがゆえに，彼の求婚に最後まで耳を傾けたのであり，六ヶ月間は結婚話を持ち出さないという条件を課したものゝ，彼の出入りを許しもしたのである。第10章で，3年間，社交界に顔を出していなかった彼女が，急に，Urbain 夫婦と舞踏会に出席すると言いだして，家族の者を驚ろかせるのも，Newman の求婚を機に，前途に明るい

徴しを読み取り始めた証拠以外の何物でもない。Claire が，何を考えているかゞ，間接手法のゆえに，我々読者に直接知らされることの少ないこの小説の中では，こうした事件を手掛りに，我々は，彼女の心の動きを読み取るより仕方がないのである。

Bellegarde 家の中でも，Madame de Bellegarde や Urbain は，八百年の伝統を持つ由緒正しい貴族という家柄に誇りを持ち，そうした社会的地位のない，単に一介の商売人（'a commercial person'）に過ぎぬ Newman の出入りを，最初から，胡散臭い目で眺めている。本来なら，とても，Newman と Claire の結婚など認められる彼等でなかったはずである。アメリカの民主々義思想が生み出した，ヨーロッパの旧大陸から見れば，全く**新しい人間**，いわば，良い意味でも悪い意味でも，典型的なアメリカ人である Newman は，もとより，社会的身分の相違など，全然認めず，平等に振舞うが，そうした態度が，フランスの階級制度の中で阿諛追従に慣れ，気位ばかり高く卑屈になった Old Marquise や Urbain には，恐らく，堪えがたい屈辱と映ったであろうと思われる。Newman に対して，最初から，非常に好意的であった Valentin でさえ，Claire に対する Newman の関心を，単なる崇拝者としての関心としか見做していなかったようで，彼の結婚の意志を聞き，得も言われぬ驚きの表情を禁じ得なかったのも，身分の釣り合いが，先ず，結婚の大前提条件である社会の住人であった Valentin には，常識的に考えられぬことであった。Valentin は，'wash-tubs' を製造する者は，'noble' ではなく，"You cannot marry a woman like Madame de Cintré for the asking."[5] と，あくまでも，彼が貴族でないのにこだわっている。[6] 一方，Newman にとって大切なことは，社会的身分として 'noble' であることではなく，人格が 'noble' であればよいのであり，事実，同国人の牧師から，'a *noble* fellow'[7] と既に呼ばれているばかりか，自らも 'noble' であるのを認めて，'But I say I am noble.' と言っており，財力のある彼は，自分に何が出来ないか，つまり，しようと思えば，出来ないものは何もない（Tell me something

I have *not* done—something I cannot do)[8]ということに，人間の価値基準を置いている。Valentin が，Newman の求婚の意志を聞いて 'horrified' し，彼が 'noble' でないのにこだわったのは，'for my traditions, my superstitions.'[9] からだと，あとで言い訳しようとも，彼がびっくりしたのは事実であり，彼の素直な驚きは，そのまゝ Old Marquise や Urbain の驚きでもあったのである。

たゞ，Valentin の当初の驚きも次第におさまって，Newman に加担する気になるのは，Newman が，大真面目であり，Claire を 'exactly what I have been looking for,' 'my dream realized' と見，"Goodness, beauty, intelligence, a fine education, personal elegance—everything, in a word, that makes a splendid woman."[10] と評価しているからであり，身分はともかくとして，'a very good husband' になってくれるものと信じ，彼との結婚が，妹の幸せに通ずるものと確信したからであろう。

更に，Bellegarde 家の者でも，Old Marquise と Urbain は，政治的には，ルイ・ナポレオンの現体制に不満であるにしても，貴族社会や昔日の威光にしがみつきながら，貴族制度を肯定し，威信を維持しようとしているのに対して，Valentin や Claire は，不可能と知りながらも，沈滞し澱んだ現状から脱出したいと願っている，否，少くとも，現状に満足していないのは確である。(たゞ，それでいながら，結局は，脱出できないところに，彼等の浸っている社会の根の深さ，因習の恐ろしさを感じさせる)。事実，Valentin は，厳格な母親の監視下に置かれ，遊興に耽る以外には，何もできないのを嘆き，a Bellegarde であるがゆえに，事業に就くことも，金儲けをすることもできなければ，ボナパルト派でないために，政界へ進出することもできず，自由なアメリカ人としての Newman の境涯を羨み，アメリカへ行って銀行家にならないかとの Newman の勧めに食指を動かすのである。

又，Claire は Claire で，前にも触れたように，気に染まぬ結婚を，一族の名のもとに強要されるやも知れず，初めて訪問した Newman に修道院の

印象を与えた 'gloomy' な Faubourg St. Germain の家から，逃れたいという淡い希望が，彼女にもあったはずで，いわば，藁をも摑む思いで，Newman に一縷の望みを託したのである。事実，Mrs. Tristram は，泣きはらした瞳で，教会を出て来る Claire に度々出逢っており，彼女は，その理由を，'She suffers from her wicked old mother and her Grand Turk of a brother. They persecute her.'[11] 'you may be sure it is to some horrid old nabob, or to some dissipated little duke 〔that they want to marry her now〕.'[12] と見当をつけている。Valentin 同様，父の死に纏る黒い霧を漠然とながら察知していた Claire は，Valentin の言葉を借りれば，'Old trees have crooked branches, old houses have queer cracks, old races have old secrets.'[13] であるこの陰惨な Bellegarde 家から逃れたいと希っていたのであり，Fleurière でのあの胸を打つ最期の別れの場面で，'There's a curse upon the house; I don't know what—I don't know why—don't ask me. We must all bear it. I have been too selfish; I wanted to escape from it. You offered me a great chance—besides my liking you. It seemed good to change completely, to break, to go away. And then I admired you. But I can't—it has overtaken and come back to me.'[14] と涙ながらに述懐するのであり，そうした妹の気持を，妹思いの Valentin が気付かぬわけはなく，Newman との結婚を千載一遇の好機会と考えたに違いないのである。

Old Marquise や Urbain は，商売人としての彼の前歴に不満ながらも，Newman の莫大な財産に兜を脱いで，一応彼を花婿候補として受け入れ，結婚できるできないは，Newman の腕次第で，ともかく，二人の仲には干渉しないとの約束で，出入りを許す。

しかし，この時の彼等の会話からも分るように，彼等は，義母と義兄，或いは，娘婿と義弟といった関係ではなく，Bellegarde の長は，恩着せがましい見下した態度を取り，Newman は敵意をむき出しにしている。陰湿で邪悪

な性質を持った根っからの貴族である Old Marquise や Urbain に，善良そのものの 'democratic' な Newman が，本能的に嫌悪感と敵愾心を抱くのは，我々としても頷ける。しかし，一家の当主が，娘や妹の縁談に容喙するのも当然のことで，それを最初から虫が好かないと言って喧嘩腰で対決するのは，Newman の側にも，越度がないとは言えず，相手の立場に立たずに，自分の希望を押し通そうとする Newman は，繊細さや思い遣りや想像力を欠くと非難されても仕方がないのである。

Urbain が婉曲に，Newman に Bellegarde 家と縁組みすることによって，a Bellegarde になるよう心掛けて欲しいと伝えても，Newman は，彼の言葉を理解しようと努力しないばかりか，友好的な態度を取ろうともしない。同じ席で，我々は誇りの高い一家であり，Claire でさえも，その例外でないと忠告する Old Marquise の胸中には，たとえ，Newman に 'an open field' を与えたとしても，よもや Claire が求婚に応じはしないであろうと高を括ると共に，Newman の出方次第では，つまり，Valentin の解説に従えば，Bellegarde の一員として 'change' すれば，Claire にその気がなくても，娘をくれてやってもよいという謎を，Old Marquise はかけていたのである。しかし，彼の戦闘的で敵意に充ちた態度から，たとえ Claire を Newman に嫁がせたところで，家名に疵こそつけ，自分達の財政が少しも潤おいはしないと結論を下すものと思われる。つまり，Old Marquise の謎を解けなかった Newman は，'an open field' を与えられたその瞬間に，Claire を失なう運命にあったのである。

Old Marquise は，Newman からけしかけられた行き掛り上，婚約披露宴（第16章）を催さなければならなくなるものゝ，第13章で，遠縁の Lord Deepmere が訪ねて来た時から，Newman に代る花婿候補として，彼に白羽の矢を当てゝいたらしく，彼等には，Lord Deepmere が，どんな人間であろうとも，肩書きと財産の二つの必要条件が揃っておれば，婿として及第なのであり，いつになく相好を崩して歓待する Urbain からすれば，誠に 'a

charming young man'[15]なのである。Old Marquise にとって，唯一の誤算は，Claire が，よりによって，Newman を愛したことであった。Claire が Newman を愛しさえしなければ，彼等としても，約束を楯に背信の廉で訴えられることもなかった。しかし，彼等は，婿は Lord Deepmere と既に決めていたのであり，だからこそ，事もあろうに，披露宴の席で，Claire に言い寄るよう Lord Deepmere を唆すのである。彼等には，Newman との約束上，直接 Claire に意向を伝えられず，間接に，Lord Deepmere を使って悟らせようとするのである。幸せの絶頂にいる Claire は，温室で Lord Deepmere に言い寄られた直後には，まだ母親の意向を読み取れずに，Newman に，"I am very happy."[16]と心から言っている。その間の事情を知らず，我を忘れて幸福感と勝利感に浸っていた Newman は，次の訪問で，全く寝耳に水に，Claire の Fleurière 行きと破談を通告される。Old Marquise や Urbain にとって，二人の結婚が 'impossible' であり 'improper'[17]であることは，読者にも理解できるが，Claire が，一見，簡単に，親の意向に屈服して Newman を諦めてしまう点が，Newman ならずとも読者にも納得がいかないのである。この点のジレンマを解決すべく，James は，早くからこの小説で，手を打ってはいる。つまり，フランスにあっては，母親への服従は絶対であるといういわば不文律を使っているのである。

> In France you must never say to your mother, whatever she requires of you. She may be the most abominable old woman in the world, and make your life a purgatory; but, after all, she is *ma mère,* and you have no right to judge her, you have simply to obey.[18]

Bellegarde 家のような人達にとっては，お家が第一であり，個人の幸福を追求するのでなく，家のために行動しなければならないのだと，Mrs. Tristram から聞かされたように，Claire も "What right have I to be happy when—...others have been most unhappy!"[19]と訴え，母親に従うことに

よって，幸福を見い出さなければならないと考える。少くとも，彼女は，と言うより，貴族仲間でも立派と仰がれるような貴族の子女は，このように考えるよう教育を授けられているのであり，それを百も承知の Old Marquise は，所謂 'authority' を行使したのである。

何気なく挿入されたこの不文律は，この小説を理解する鍵の一つであるばかりか，中期の *The Spoils of Poynton* (1897) との接点ともなっており，あの作品では，有無を言わさぬ絶大な権威を持つフランスの母親とは対照的に，厄介なイギリスの慣例のために，息子の結婚に際して住みなれた大邸宅から追い出される弱い母親の立場が描かれており，フランスとイギリスの習慣の違いによるそれぞれの母親像が，この二作品で対比されている。しかし，フランスにあっては不文律である母親の権威も，アメリカ人である Newman はもとより，そういう不文律に馴染まぬ読者には，James が，当初期待したほどには説得力を持たず，一番理解し難い原因になっているのである[20]。

この小説の執筆動機が，先にも触れたように，アメリカ人が知らないうちに欺かれ，ひどい仕打ちを受ける状況を描くことにあったため，James には，何が何でも Newman が Bellegarde 家から斥けられなければならなかった。進行中に筋がその物語りの論理に従って発展し，結末が自然に生まれたのでなく，結末が最初から用意されていたところに，この小説の後半の無理が生まれる原因があるように思われるのである。途中で他界してしまった Valentin はともかくとして，Bellegarde 家の者が一丸となって Newman を裏切る方が，むしろ納得のいく結末となっていたかも知れない。しかし，作者は，女性の理想像にも近いはずのヒロインを裏切り者としてゞはなく，親のエゴイズムのために，現世での幸せを捨てる悲劇の美しいヒロインとして終らせなければならなかったところに，作者のジレンマと無理が潜んでいたのである。もとより，作者自身も，その無理さ加減は承知の上で，その不文律を補う手段として，古い家系の呪いや母が父を殺した暗い過去から来る母への恐怖といった Gothic Romance まがいの小道具を並べ，作品を一層 'melodra-

matic' にし，つまらなくしてもいる。その無言にしろ有言にしろ，母の脅迫に唯々諾々と従い，Lord Deepmere と結婚すれば，それは，まさしく変節であり，自主性も何もない automaton, ヒロインの名にさえ値しない存在になってしまうおそれがあり，James は，親の面目を立てると共に，[21]恋人への愛をも貫く悲劇の美しいヒロインとして，Claire をカルメル派の修道院へ送るのである。彼女が，修道女になるのは，一方では，親の面目を立てながらも，Lord Deepmere を迎えない点で，母や Urbain に対するせめてもの反抗であり，他方では，現実的な Newman にとっては，無念な敗北や現実逃避としか考えられないにしても，Newman への愛の証しであり，彼女にあっては，決して現実逃避などではなく，悲しいながらも，現実に残された善後策の中では，最高の解決策であったことを，我々は理解しなければならない。現世で，Newman を諦めなければならなかった Claire のその間の苦悩を，我々は，Newman を諦めさせられ，Paris を追われようとした Claire が，不意の彼の訪問で心を乱し，思わず苦衷を訴える第18章の冒頭部と Fleurière での彼との悲しい最後の別れの場面（第20章）を，細心に読めば，察せられるはずである。

しかし，Claire が，修道院に籠ってしまう点にも，問題が全然無いわけではない。成程，彼女が，Old Marquise や Urbain と同じように Newman を裏切らないためにも，又，Valentin が妹に対して抱き，かつ Newman もそう信じた理想の女性としての Claire の印象を損わないためにも，更には，Mrs. Tristram が言ったように，彼女を文字通り聖女にするためにも，彼女を修道女にしなければならない理由を，我々は，一応は理解できる。それでもなお，ある不自然さを感じるのは，Claire の宗教的な内面生活が，我々読者に明らかにされていないからと思われる。意地の悪い見方をすれば，修道院とは縁もゆかりもなさそうなあの極楽トンボの Valentin が，

> I am good for another five years, perhaps, but I foresee that after that I shall lose my appetite. Then what shall I do? I think I shall

turn monk. Seriously, I think I shall tie a rope round my waist and go into a monastery. It was an old custom, and the old customs were very good.[22]

と言っているように，James も，世の顰に倣って，小説の安易な解決策として，Claire を修道女に仕立てたようにも思える。勿論，この Valentin の言葉は，遊び飽きて，他になにもすることが無くなれば，修道院へ入ればよいという宗教とは程遠い安易な生き方を肯定するための言辞などではなく，Claire ののちの行動を読者に納得させるための伏線として，挿入されたものであり，Claire が事あるごとに教会に出入りする敬虔なカトリック教徒であることが暗示されてもいる。次の Valentin の言葉は，常に神の照覧を意識する彼女のクリスチャンとしての側面をよく伝えていると共に，修道院にあっても，彼女が，決して，Newman が案ずるように不幸でないことを示している。

"I won't say that [she is unhappy], for unhappiness is according as one takes things, and Claire takes them according to some receipt communicated to her by the Blessed Virgin in a vision. To be unhappy is to be disagreeable, which, for her, is out of the question. So she has arranged her circumstances so as to be happy in them."[23]

このように伏線が，皆無でないにかかわらず，なおかつ，我々読者が不満を感ずる最大の原因は，我々が，彼女の苦悩の軌跡を，Newman の苦悩の軌跡ほど，丹念に追えないからである。我々が，彼女の心の中に入っていけない理由は，一つには，彼女が，Valentin のように，自分の考えを彼と交換し合うタイプの人でなく，非常に寡黙な女性であり，我々読者はもとより，Newman でさえも，彼女の会話よりも，優雅な立居振舞いの与える印象を楽しむことで満足しなければならなかったばかりか，彼女には来客も多く，Newman が，彼女を独占できる機会も稀れであったことにもよる。彼女について，我々の知る手だては，Mrs. Tristram や，Claire の熱烈な崇拝者の一人で

ある実兄 Valentinの説明なり讃辞を通してゞあり，Claire と Newman が会話らしい会話を交わすのは，全編を通じて，数えるほどもないのである。そして，第二に，この小説が，主人公Newmanの視点を通して間接的に描かれているため，技術的にも Claire の細かい心理の動きの中へ入っていけなかったことにもよる。ましてや，その視点を置かれた Newman の意識は，必ずしも，全幅の信頼を置ける‘a reliable reflector’ではないのである。殆んど，教育らしい教育も受けず，ヨーロッパ社会については無知も同然の‘the great Western Barbarian’とさえ評されているNewman の現実認識は，後手後手に回り，作者は，その穴を埋めるために，Mrs. Tristram や Valentin の口を借りて，ことの真相を読者に漏らしているほどである。事業では，人一倍，抜け目なさを発揮するはずの彼も，ことヨーロッパ人に対しては，洞察力も想像力も働かないようで，真実を目の前に突きつけられるまで，例えば，Nioche 父娘の本性を見抜けないのである。しかし，Nioche 父娘やフランスの貴族社会に対する認識は，物語の進展と共に，経験を積みながら，深まっていくにしても，Claire に対する彼の認識は，決して深まってはいない。つまり，James は，意識的に，アメリカ人としての Newman に意識の限界を与えている。従って，読者は，特に第20章において，Claireの，時には相矛盾した片言隻句の訴えから，彼女の深い苦悩を読み取らなければならず，愛しながらも，約束を反古にしなければならない彼女の苦しみは，修道院に入って神の慈悲に頼る他，救われる道がないのだと納得しなければならない。しかも，彼女は，神の前で，自らの犯した罪におのゝく罪深い女性ではなく，母や兄の迫害を堪えるために神に縋る女性であるゆえに，作者は，彼女の黙ってじっと堪えている様子しか書けなかったと思われるのである。恐らく，この作品における James の関心は，題名が示すように，新しい人間典型を国際状況下に置き，その反応振りを，新しく開発しつゝある視点という技法を通して描くことにあったはずで，確に，一人の典型的なアメリカ人を描く上には，国際テーマも視点も共に成功していると断言できても，

ヒロインの苦悩を描く点では，必ずしも，成功したとは言えない。間接的手法と言っても，Valentin などは，かなりうまく描かれている事実を見れば，「心理的理由ほどつよく心を引くものはまずないといっていい」と言った James も，新しく発見したテーマに気を奪われて，つい彼女の苦悩の有様と敬虔な内面生活の分析にまで，筆が及ばなかったのであり，この点では，我々は，この時点での作者の力不足を認めなければならないと思われる。ちなみに，この小説の物語を構成する上で，大きな影響を受けたと言われる Turgenev の *The House of the Gentlefolk* (1858) のヒロイン Liza も，愛する Lavretsky と別れて修道院生活を選ぶが，その過程は，全然不自然さを感じさせない。彼女は，最初から神を畏れる敬虔な女性として描かれているばかりか，Turgenev は，友人の忠告を入れて，彼女が幼い頃，乳母 Agafia の敬神性を吹き込まれるに到る次第を，わざわざ付け加えてさえいるのである（XXXV）。まさか，James は，Turgenev や Balzac に倣って，小説を結末に導く方便として Claire を修道院へ送ったわけではないであろうが，そう疑いたくなるほど，この点は不出来である。しかし，そうした表現上の欠点があるにもかゝわらず，家門の誇りのゆえに，たとえ，彼女自身が神の前で幸せを見出しているにせよ，唐突に，我々の前から姿を消した Claire は，それだけに，現世の幸福を犠牲にした薄幸のヒロインとして，Newman や読者の脳裡に，皮肉にも，焼きつくことも事実なのである。

James は，後年，New York Edition につけた‘Preface’で，Old Marquise や Urbain は，Newman の金に対してもっと貪欲であってもよかったと反省しているが，[24] 年を経たために，執筆当時の目的を忘れてしまった言葉として，承服できないのである。彼等が，Newman の財産を喉から手が出るほど欲しく思っても，貴族としての誇りと威信にかけて，一介の商売人でしかないアメリカ人との縁組を許さなかったばかりか，Newman との結婚よりも，娘の修道院入りを是とした彼等の厳しい妥協を許さない態度こそ，James の見いだした国際状況が，一番良く表現されているからである。つまり，

Newman にしろ，Bellegarde 家の者にしろ，国柄や風習の違いを互いに理解出来ずに，対立や無理解や誤解が残り，(笑って済ませられる場合があるにしても)，時には，悲劇へと進展して行くところに，国際状況小説の真髄があるからである。

しかし，James のこの反省は，彼のジレンマのありかを，如実に物語ってくれてもいる。つまり，もし，彼等が Newman のお金にもっと執着したならば，彼のジレンマの核をなした親の権威を，わざわざ持ち出して Claire に翻意を促さずともよかったし，Claire も，Newman を裏切る形に追い込まれずとも済んだからである。

*The Atlantic Monthly* で，この小説の連載が終った時，W. D. Howells (1837－1920) が，この作品が happy ending で終っていないことに異議を唱えたのに対して，James は，

> "I quite understand that as an editor you should go in for 'cheerful endings'; but I am sorry that as a private reader you are not struck with the inevitability of the *American* dénouement. I fancied that most folks would feel that Mme. de Cintré *couldn't,* when the finish came, marry Mr. N[ewman]; . . . they would have been an impossible couple . . . ."[25]

と答えている。成程，Old Marquise や Urbain は，彼等の結婚を，'improper' で 'impossible' と見做し，結果的には，結び合わされることのない二人であったにしても，果して，この手紙で弁明しているように，作者の James まで，本当に，この二人を 'an impossible couple' と考えていたのだろうかという疑問が湧いて来る。Claire に対する Newman の態度が，商品を売買する商売人のようだと，しばしば非難されようとも，又，恋などしていないと自分自身に強がりを言ってみたところで，[26] 彼が Claire に夢中であることは，読者には自明の事実であり，Claire も，当初はともかくとして，次

第に彼を愛するに到った経緯は既に述べたところである。しかも彼等は，いずれもが，Baron de Mauves や Gilbert Osmond のような‘immoral’で‘egoistic’な人物ではなく，結婚後も互いに相手の理想像に少しでも自らを近づけようと念じているとすれば[27]，何故，彼等が，‘an impossible couple’であるのか理解できないのである。Claire を妻に求める Newman の態度には，egocentric な面がなくはないにしても，決して egoist ではなく，愛の対象である Claire や Valentin には献身的でさえある。例えば，この手紙の中で James は，彼等の住む場所まで心配しているが，Mrs. Bread が言ったように，Claire にとっては，Paris から遠ければ遠いほどよかったのであり，第一，（James ならいざ知らず）愛する二人にとって，住む場所など問題ではなかったはずである[28]。彼等の生い立ちや，思想や習慣が余りにもかけ離れ過ぎると言うのであれば，それをこそ Claire は，‘a great pleasure’だとし，‘I would have said it was just *because* you were so different that I might be happy.’[29] と言ってさえいる。多くを望まず，小さな幸福だけで満足できる Claire にとって，Newman は，何ら不服の材料を与えてはいない。[30] それをしも，Claire は Newman を愛していなかったのだと考えるとすれば，それこそ，James の本来の意図とは全くかけ離れた食わせ者となるであろう。Howells に宛てたあの言葉は，必竟するに，Claire が Newman を愛しながらも，最後には捨てゝ修道院入りしなければならなくなった理由を，親の‘authority’以外には，充分納得のいく理由を見い出し得なかった苦しまぎれの遁辞であり，James のジレンマが，Claire の修道院入りの薄弱な動機にあるのを示す好例がこゝにもう一つあるのである。妹ながらも，崇拝の余り理性的に妹を語ることが出来ないという Valentin の前口上があるにしても，我々読者は，Claire が‘half a *grande dame* and half an angel’‘so complete or so perfect’[32] な女性であると聞かされ，‘She is the most intelligent woman I know. Try her some day, with something difficult, and you will see.’[33] との保証を耳にしている

だけに，Newman と共に，彼女の身の処し方に大いに期待してしまうのである。James は，Valentin が信じているように，Claire が Newman や読者の期待に応えてくれる場面を，後半で用意するつもりであったと想像されるが，結局，母の強要に半ば屈することによって，その期待を全うできず，理想の女性のイメージが完成されないまゝ，画竜に点睛を欠く結果になったのである。James は，フランスの下層階級に生まれ育った運命にじっと堪え，ルーヴル美術館で名画の模写をしながら，綺羅を飾った上流階級の婦人達を羨望の眼で眺め，いつの日か，華やかな社会の表面に浮かび上る自らの姿を夢見，利用できるものは全て利用しながら，確実に，その野心を実現していった Noémie Nioche や，その娘の野心に不甲斐なくも引きづられてゆく尾羽打ち枯らした父の，いわば，テーゼないしアンチ・テーゼとして，Claire とその母を創造した。世の中の苦労や穢れを知らない全く純心無垢な娘や，道徳意識の発達した娘が，親兄弟，又は周囲の者からの強制や反対を受け流し，あるいは斥けながら，自らの人生を自らの意志で切り開き，たとえ不幸な結果を招こうとも，その責任は自らが負うという精神的に強靱な女性像は，James にあっては，あるいは，アメリカ娘にしか与えられない特権であったのかも知れない。James が，後の諸作品で，ヒロインが，この苦難の多い人生で如何に生きるかというパターン化したテーマは，少くとも，この小説では，作者の関心外であった。というより，一方では，母親の権威という不文律を核にした国際状況から，他方では，逞しく生きる悪女 Noémie に掣肘されて，関心の対象にしたくともできなかった。そうした問題は，主人公達の心理分析への関心の高まりとあいまって，後の諸作品に待たねばならなかったのである。結局，この小説が，国際状況をテーマに選んだゆえに，副産物として生まれた親子の問題を徹底して描けなかった James は，次の *Washington Square* で，改めて親子の対立を，今度は国際状況抜きで，正面から取扱うことになるのである。

注

1 Henry James, *The Art of the Novel* (New York : Charles Scribner's Sons, 1937), pp. 21−22.

2 Henry James, *Washington Square* (New York : The Modern Library, 1950), p. 280.

3 Henry James, *The American* (New York : Holt, Rinehart and Winston, 1963), p. 36.

4 Newman の 'a confidante' である Mrs. Tristram は, 事件の中心から離れていながら, 状況を正確に把握している, いわば, 作者に代わる解説者, 又は「蔭の声」としての役割を果しており, 時々に語る彼女の解釈を, 我々読者は, 百パーセント信じてよいように思われる。

5 Henry James, op. cit., p. 108

6 その証拠に, After all, you couldn't help it if you were not a duke. There were none in your country, but if there had been, it was certain that, smart and active as you are, you would have got the pick of the titles. (pp. 151 − 152) と言っているばかりか, 自らが, アメリカへ行って銀行員になるのを 'derogate' (p. 225) と考えているのである。

7 *Ibid.*, p. 63.

8 *Ibid.*, p. 108.

9 *Ibid.*, p. 110.

10 *Ibid.*, p. 109.

11 *Ibid.*, p. 75.

12 *Ibid.*, p. 76.

13 *Ibid.*, p. 113.

14 *Ibid.*, p. 277.

15 *Ibid.*, p. 178.

16 *Ibid.*, p. 220.

17 *Ibid.*, p. 242.

18 *Ibid.*, p. 75.

19 *Ibid.*, p. 274.

20 もっとも, Newman にとって理解し難い不文律なればこそ, 風俗習慣の相違に着目した国際状況の小説の鍵になっていることも事実なのである。

21 事実, 婚約披露宴の席で, うわべは Newman に愛想よくしていた貴族連中も, Old Marquise が, 気が遠くなりそうなので, 会場を退出したとの噂を耳にして,

"She has succumbed to the emotions of the evening,"...."Poor, dear marquise, I can imagine all that they may have been for her.!"(p.218) と同情を寄せ, Bellegarde Family にとって, 如何に今夜の出来事が屈辱であるかを示している。

22 *Ibid.*, p.94.

23 *Ibid.*, p.103.

24 They would positively have jumped then, the Bellegardes, at my rich and easy American, and not have "minded" in the least any drawback — especially as, after all, given the pleasant palette from which I have painted him, there were few drawbacks to mind. (*The Art of the Novel*, p.35)

25 Oscar Cargill, *The Novels of Henry James* (New York: The Macmillan Company, 1961) p. 60.

Henry James, *Letters*, ed. Leon Edel (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1975) II. p.104.

26 He [Newman] flattered himself that he was not in love, . . . (p.162)

27 At last she [Claire] said, "Depend upon it, I don't come up to the mark; your mark is too high. I am not all that you suppose; I am a much smaller affair. She is a magnificent woman, your ideal. Pray, how did she come to such perfection?" . . . "I really believe, . . . that she is better than my own ideal. Do you know that is a very handsome compliment? Well, sir, I will make her my own!" (p. 206)

If I get hold of a woman that comes up to my standard, I shall think nothing too good for her . . . . I am not afraid to say that I shall be a good husband. (p.109)

又, Claire が, 手の届かぬ所へ行ってしまってもなお Newman は, 次のように考えている。He had a fancy of carrying out his life as he would have directed it if Madame de Cintré had been left to him—of making it a religion to do nothing that she would have disliked. (p. 351)

28 先にも引用した 1877 年 3 月 30日の Howells 宛の手紙の中で, Mme de Cintré couldn't have lived in New York; depend upon it; and Newman, after his marriage (or rather *she*, after it) couldn't have dwelt in France. (*Letters*, II, pp. 104—105) と James は述べているが, 作品の中では, Claireに次のように言わせている。

I think if I were to marry you I could live almost anywhere. You have some false ideas about me; you think that I need a great many things — that I must have a brilliant, worldly life. I am sure you are prepared to take a great deal of trouble to give me such things. But that is very arbitrary; I have done nothing to prove that. (p. 181)

29 *The American,* p.181.

30 ちなみに，Claire は，言い知れぬ幸福感を次のように伝えている。

Madame de Cintré was calmly happy before the world, and Newman had the felicity of fancying that before him, when the world was absent, she was almost agitatedly happy. She said very tender things. "I take no pleasure in you. You never give me a chance to scold you, to correct you. I bargained for that, I expected to enjoy it. But you won't do anything dreadful; you are dismally inoffensive. It is very stupid; there is no excitement for me; I might as well as be marrying some one else." (p. 205)

31 *Ibid.,* p. 102

32 *Ibid.,* p. 103

33 *Loc. cit.*

# Henry James's Dilemmas in *The American*

## —especially on Claire de Cintré—

Teruomi Arima

When Henry James was seated in an American horse-car, he happened to hit on an international situation in which an American was to be betrayed and wronged by a French noble family, the Bellegardes. At first they disliked Christopher Newman just because he was not an aristocrat, but only a 'commercial person' in America. But they were dazzled by his money, and they allowed him to court their widow daughter, Claire de Cintré, against their will. They pledged to marry, but at the last moment her mother (Old Marquise) and eldest brother (Urbain) ordered her not to marry him in spite of their promise to give him an open field. In this case James fell into a dilemma in which he had to entangle Claire in betraying and wronging Newman as her family did. She was a sort of beautiful, ideal lady, 'half a *grande dame* and half an angel' not only for Newman and her second brother Valentin, but probably for the readers. James would not, and could not portray his heroine as a bad character as her wicked mother and eldest brother. Properly speaking, as the heroine she must not betray her lover whatever may happen. But James was so possessed by his idea that 'Newman should be ill-used — which was the essence of my subject — that I attached too scant an

importance to its fashion of coming about,' as he admitted himself in his Preface years later. And James used something like common law established only in France, that is, mothers' authority as a means to compel Claire to give up Newman and betray him. But his happy idea of "mothers' authority in France" was not persuasive as he had expected. He again fell into a dilemma in which he could find no other convincing reason to drive his heroine into the Carmelites' convent than the mothers' authority. So he went so far as to resort to melodramatic effects common in the Gothic Romance. In the earlier part of the novel, her brother Valentin said to Newman, "She is the most intelligent woman I know. Try her some day, with something difficult, and you will see." But at her trial of choosing between her lover and her mother, she failed our expectations and obeyed her mother, giving up Newman. Of course she did not completely betray him and marry Lord Deepmere, her cousin several times removed, but she decided to part with her dear lover with whom she promised to marry. She did not even try to fight bravely with her mother. We could not understand her psychology: why she so easily succumbed to her mother's command, because we perfectly knew how much she loved Newman and that she was her own mistress. James could not make clear her sufferings partly because he represented this novel through an indirect method, partly because she was described as a rather reticent person. So she retired to the Catholic convent without our knowing how painfully she suffered. James was so much bent on describing the international situation through Newman's point of view that he could not afford to analyze Claire's suffering mind and to develop the novel farther showing the conflict between rigorous mother and pious, intelligent daughter. He was to do it in some transformed shape in his

next novel, *Washington Square.*